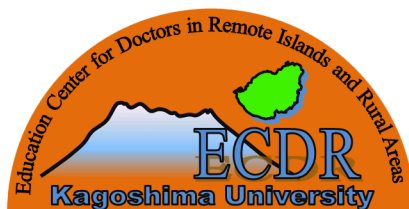


地域医療トレーニングキャンプ 報告書

2009
in
北山



地域医療トレーニングキャンプin北山 概要

◆対象◆

地域医療に興味のある医学科学生、保健学科学生、歯学科学生

◆目的◆

医療施設の見学だけでなく、地域住民との交流を通して地域社会を知ることによって保健・医療・福祉の位置づけを考える。また、地方の食、自然などを体験し、地方の魅力も体験する。このような活動から、離島やへき地を多く抱える鹿児島県の地域医療の現状を知り、地域医療の意義や役割について考えてもらう。また、医学科と保健学科、歯学科の学生の交流を通して、地域医療におけるチーム医療の重要性についても考えてもらう。

◆対象地域◆

始良町北山地区

◆実習期間◆

平成21年9月2日(水)～3日(木)

◆実習場所◆

北山診療所および北山地区



◆宿泊場所◆

北山野外研修センター

◆参加費用◆

1,000円 (食費・宿泊費含む)



◆協力◆

始良町役場・北山地区コミュニティー協議会・北山診療所・北山野外研修センター・北山食事処しきおり・北山農産加工センター

◆指導教員◆

嶽崎 俊郎 (鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター センター長 兼 国際島嶼医療学講座教授)

大脇 哲洋 (鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 特任教授)

根路銘 安仁(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 特任准教授)

新村 英士 (鹿児島大学大学院医歯学総合研究科国際島嶼医療学講座 講師)

西山 毅 (鹿児島大学医学部・歯学部附属病院発達系歯科センター口腔保健科 助教)

中村 康典 (鹿児島大学大学院医歯学総合研究科顎顔面機能再建学講座 助教)

平佐田 和代(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科国際島嶼医療学講座)

◆参加学生◆

【医学部医学科】

カサノバ ヒロシ(4年)、川瀧 正典(1年)、刈屋 朋(4年)、鮫島 浩継(1年)、中村 昭彦(5年)、松下 裕亮 (1年)

【医学部保健学科】

宇都 亜輝子(2年)、久木田 絵里奈(2年)

【歯学部】

秋田 陽子(5年)、阿部 繁和(5年)、伊集院 彩(5年)、原 啓悟(4年)、村山 真(5年)

◆スケジュール◆

	開始時間	終了時間	場所	内容(概略)
第1日目 9/2(水)	8:00		鹿児島大学医学部ピロティー	鹿児島大学医学部ピロティー前集合。出発(貸切バス)
		9:30	北山診療所	北山診療所到着
	10:00	10:50		北山診療圏バスツアー(木場、堂山、中甕、山花、県民の森)
	11:00	12:00	北山診療所・宮脇公民館	北山診療所(オリエンテーション、診療見学・血圧測定実習)
	12:20	13:20	宮脇公民館	昼食(「北山食事処 しきおり」)
	13:30	16:00	木津志出張診療所	木津志出張診療所(健康教室・血圧測定・コミュニケーション・口腔ケア)
				13:30 14:30 健康教室 14:30 16:00 口腔ケア指導・講演
	16:45	17:15	スターランドあいら	プラネタリウム
17:00	19:00	宮脇公民館	講演会(北山地域の医療)	
19:00	21:00	宮脇公民館	地元の人たちと交流食事会	
23:00		北山野外研修センター	宿泊(就寝)	
第2日目 9/3(木)	7:30	8:50	北山野外研修センター	起床 朝食・出発準備
	9:00	11:00	北山(各地区)	フィールドワーク
	11:00	12:00	宮脇公民館	フィールドワーク報告会
	12:00	14:00	北山農産物加工センター	そばうち体験・昼食
	14:00		北山診療所	北山診療所出発
		15:30	鹿児島大学医学部ピロティー	大学で解散





学生レポート



地域医療トレーニングキャンプ
IN北山に参加して
医学部保健学科看護学専攻2年 宇都亜輝子

今回、この企画に参加するにあたっての私の動機は、以前からの夢であった「地域医療にかかわりたい」というのが一つ、もう一つは「そば打ち」や「地域住民との交流」といった楽しそうな企画にぜひ参加したいという単純な思いからであった。実際、北山の地に足を踏み入ると普段見ることのできないような風景が広がっていた。見渡す限り山・田んぼ・そして山。こんな場所がこんな近くにあったのかとただ驚いた。また、空気の美味しさ、空の青さなど市内にいては感じるることのできないようなことも感じる事ができた。

今回の企画のなかで私にとって「健康教室」と「フィールドワーク」を通しての学びが特に多かったように感じる。

まず、「健康教室」では看護師の方々がそれぞれ3つの分野に分かれ住民の方々に話をされていた。町の病院であれば薬剤師・栄養士・理学療法士が行うような範囲のことである。

だが、ここでは3名の看護師が行っている。ほかの職種がなかなか近くにいない中で自分たちでできることを考え、それを住民の方々へ提供する。このことから看護師の方々のパワーや地域医療に対する熱意を感じた。

「フィールドワーク」においては、歯学・医学科の学生とともにあるお宅へ訪問させていただいた。医療の話はもちろんであったが、北山での生活・自給自足のことについても話をたくさん聞くことができた。その中で、特に強く感じたことは北山に住んでいる人は本当に北山が好きだということである。自分の住んでいるところが一番だ、好きだという地域への熱い思いも市内にいてはなかなか感じることができない。

今回、この企画に参加させていただき地域医療の魅力を感じることができたと共に、自分の将来の選択肢が一つ増えたように感じる。

また、看護師として最も必要なことが何かを3人の看護師の方々の姿から学ぶこともできた。「なぜ医（看護）をこころざしたのか。」そのことを考える機会ともなり、自分にとって看護とは何かということも再確認できた。

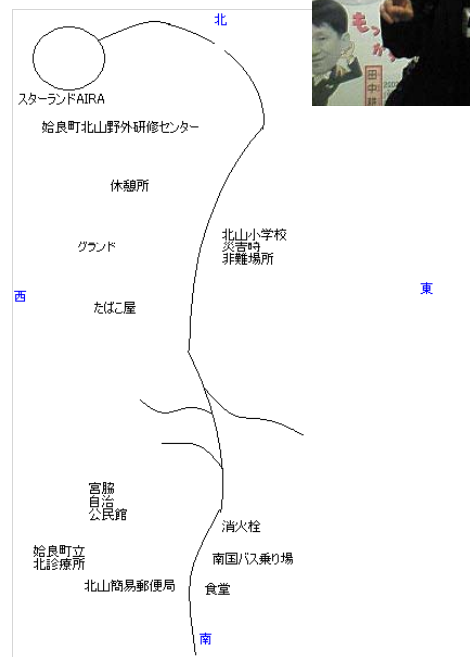
今回、たくさんの方々のおかげでこのような素晴らしい企画に参加させていただくことができたと思う。また、地域住民の方々の温かいもてなしから地域の素晴らしさ・温かさも感じる事ができた。

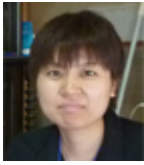
また北山に来年も来たい、おいしいご飯を食べたり、たくさんの人ともっともっと触れ合いたい、そう思えた2日間であった。



地域医療トレーニングキャンプ2009
in北山レポート
医学部医学科4年 カサノバヒロシ

2009年9月2日と3日に始良町の北山診療所に医療トレーニングキャンプが行なわれた。北山診療所の、毛利先生と診療所の看護師さんたちと色々な所に行き、とても楽しかった実習だったと思う。まず、2日の朝7:50に第一講義室の隣で集合した。そこから、バスに乗って約1時間を掛けて北山に到着した。北山地域の住民の皆様と挨拶を終わった後に、各施設の見学があった。バスで色々な所を回った後に、北山診療所に入ってキャンプのメンバーの挨拶が行なわれた。北山診療所が綺麗に整理されていることに驚いた。挨拶を終わった後に、公民館で血圧測定の実習が行なわれた。血圧測定が終わった後に、先生たちとの食事の時間だった。たった1泊の実習だったんですが、非常に貴重な体験をさせていただいて、心から感謝しています。夜の食事会の時に、北山地域の住民のかたたちと酒を飲みながら、話をできてとても嬉しかったです。都会に住んでいる時に、経験できない体験をできたので、この実習の経験を活かして、将来どんな患者であっても対応できるように頑張りたいと思います。鹿児島大学の離島センターの先生たちにも再び感謝の気持ちを表明したいと思います。そして、北山地域住民の皆さんにも、感謝しながら、今回の体験で得た知識と経験を一生忘れないことを約束しながら、このレポートを終わりたいと思います。ありがとうございました





北山キャンプに参加して

医学部医学科4年 苅屋朋

「事件は会議室で起こってるんじゃない。現場で起こってるんだ。」

あるドラマのお決まりの台詞だ。今回のキャンプにおいてもまさにそんな感じだった。いくら学校で教科書を前に学んでも決して得られることのないことばかりを学べたと思う。

そのひとつとして地域における医療の役割がある。最近地域医療をする総合医の育成という言葉をよく耳にする。しかしながら実際総合医になっても働く場所が少なく結局は専門医になるほうが賢い選択だと現場の先輩の先生に聞いた。北山も始良ニュータウンを近隣に持ち、専門の医師にかかることも可能で、総合医のように活躍する先生がどれほど必要なかいささか疑問を持っていた。地域で医療をするよりも交通の便をよくすることで医療を取り込むことのほうが簡単だ。しかしこの地域では独自の医療機関を地域で持ち、それを地域全体で支えている。いったいなぜなのか。机上の空論は尽きない。そんな思いで北山を訪れた。びっくりしたのは地域の人が大勢で迎えてくれたことであつた。たかが学生のためにこれほど集まってくださるとは思いもよらなかつた。夜も朝も食事を手作りで出してくださり、たくさんお話も聞くことができた。診療所があることで安心をしているという声をたくさん聞いた。よくよく聞くとそれは診療所という存在ではなく、医療スタッフの人情によってそれが出来上がったものであることがわかつた。そしてそれを支えることが地域を支えていることに気が付いた。若い人も減ってきて地域も勢いが落ちてきている。健康が損なわれれば家に引きこもる人が増え益々活気が失われる。親身になって考えてくれる医療スタッフのお陰で地域が安心して機能できるのではないかと感じた。もちろん大きな病院の専門医も必要だ。しかし地域としての観点でみると、それはいわゆるかかりつけ医つまり地域医的な存在で十分だ。現場の空気が私の疑問をどんどん溶かしていくようだった。また、地域の方が医療スタッフを育てていきたいという思いも汲み取れた。だからこそたくさんの方が歓迎してくださつたのではないかと思う。

地域の方とお話している中でたくさんさんの経験を聞くことができた。人生の大先輩であり、農業のプロなんだなあと改めて感じ尊敬の念をもつことができた。ほとんどの方が80を超えてもしっかりされている秘訣がここにあるのだと感じた。

そのほかに歯学部の方と初めて一緒に活動をしたが、口腔内のことに関して全く無知で関心もなかつたことが少し恥ずかしく感じた。いろんな角度から生活を見ていけることがとても興味深かつた。

「ただいま」といえば「おかえり」と返ってくる声がある。北山はそんな雰囲気のある場所であつた。それは家庭にも似ている。家族崩壊が叫ばれている現在。北山から学ぶことは医療以外にもたくさんあつた。それは地域のかたの笑顔であり、誰かを想う優しい

心だ。自分ひとりで生きているという傲慢な考えでなく誰かのお陰で生かされていると感じることができ嬉しかつた。「わがばっかいよければいい」など思わずみんなの笑顔を作るお手伝いを私もできたらいいと思う。気づかせてくださったたくさんの方に感謝します。



北山トレーニングキャンプを終えて

医学部医学科1年 川瀧正典

このトレーニングキャンプを振り返って、考えも含め感想を書きたいと思う。今まで北山には一度も行つたことがなく行く前は北山と聞いてもはっきり場所が分からなかつた。しかし最初の堂山出張診療所や木場出張診療所を見たとき祖父母の家の雰囲気にとても似ていたので懐かしく思い、親しみを持てた。また診療所は北山診療所を除いて、簡易な診察だけができる医療設備がほとんど無い環境でこれは予想以上であつた。木津志出張診療所では近隣の人たちと共に健康教室を受けた。健康教室では最近はやっているインフルエンザのことや健康を維持するため習慣や筋肉を維持するための運動を紹介していた。この地区のように近所に病院がなく、出張診療所しかない地域では病気になるための健康維持、予防が重要であるということを改めて認識した。健康教室のあとは近隣の人たちの口腔ケア教室と歯科医師による診察が行なわれた。今までこの地区のように過疎が進んでいる地域の住民にとって病気にかからないことが重要であるとなればかりに注目していたが、口腔ケアも住民の健康を守っていく上で肝心なことであることに初めて気が付いた。講演会では看護師の方や住民、毛利先生の話をついた。先生はただ出張診療所でそこに来た住民の診察を行なうだけでなく民生委員の方とも協力して、家に閉じこもってしまっている患者を見つけ、診察を行なうなどの活動も行なっており、これを聞いたときこれが地域医療の理想的な形の一つではないかと感じた。夕食では住民の方がその日の朝に釣ってきたという鮎を溶岩の上で焼いて、それを夕食としていただいた。食事は非常においしく、住民の方も優しく、月明かりが非常に美しい夜であつた。朝食も住民の方に作っていただいたが、朝食とは思えないほど豪華なものだつた。フィールドワークでは民生委員の方ともに住民のかたの話をついた。住民の方はとても友好的であつた。いろいろなお話を聞いたが、やはり住民の方の健康に対する意識が予想以上に高いことや毛利先生の出張診療をかなり頼りにしていることがひしひしと伝わってきた。報告会では住民の耕していた野菜畑や水田などの写真も織り交ぜてフィールドワークでついたことを発表した。自分たちの班だけでなく他の班も住民の方と友好的に交流ができたようでよい報告会であつたと思う。そば打ち体験は初めてでどうなることやらと思つてしたが楽しく、またそばにしてはかなりコシのあるものができた。この二日間様々な活動を行なつたが、鹿児島から小一時間車で離れただけでこれほど環境が

わるのかと衝撃を受けたことなど日常生活ではまず体験することはない体験をし、非常に様々なことを考えさせられた。この経験を将来の未来像を考えていく上で糧にしていけたらと思う。協力していただいた住民の方々はもちろん、このような機会をあたえて下さった根路銘先生や職員の方々の深く感謝したいと思う。



地域医療トレーニングキャンプ2009

医学部保健学科看護学専攻2年 久木田絵里奈

「君はなぜ医を志したのか」
毛利先生のこの言葉が今回のキャンプで非常に印象に残った。

山と川に囲まれた自然いっぱいの場所に北山という地域があった。そこに住んでいる方々は、素敵な笑顔で初対面の私たちを温かく迎えて下さった。それと同時に高齢化や過疎化という言葉が頭を過ぎった。迎えて下さった方たちは平均年齢およそ65歳だったように思われる。自給自足で毎日を暮らしている北山の方たちにとっては、過度な農作業は体に酷であろう。また、老夫婦で暮らしている方が多く、どちらか一人でも倒れたり、けがなどしたら、もう一人の方の負担が更に重くなる。

このように苦勞が多くてもなぜ、この北山で暮らしたいと思うのか、最初は、住み慣れた土地であるからだろうと予想していた。

しかし診療所のスタッフのみなさんのお話や活動内容を聞いたり、見たりしていくうちに、自然とそれ以外の理由が分かってきた。

毛利先生を始め、看護師、保健師の方々みなさんが一丸となって、北山に在住の方々が健康であって欲しい、という気持ちが猛烈に伝わってきたからだ。

それは、健康教室で3人の看護師の方たちが薬品、運動など専門外である3つの領域に関して、それぞれが学んだ知識を提供する姿、患者さんの細かなことまで記入されてあるカルテなど、様々な場面から感じることが出来た。そして、その一生懸命な姿は、北山の方たちに「感謝」という気持ちに繋がっているのだと思った。

バスをもう少しよりよく開通させれば、卓越した医療を受けることも可能である。しかし、それでもなお、北山診療所を利用する患者さんが多いのは、親身になって相談に乗ってくれる医療従事者の存在があるからだと思えた。

私自身、なぜ医を志そうと思ったのか、それは人の命を守ることができる医療が単純かもしれないがすごいと思ったからだ。大学を卒業し、臨床の場に出た時、いつでもこの気持ちを忘れずにいたい。



北山FW

医学部医学科1年 鮫島浩継

今回は始良町の北山というところでのFWに参加してきました。鹿児島大学から車でわずか1時間という距離であんなに自然いっぱいのところがあるなんて、まだまだ鹿児島のことをちっとも知らないなと思いました。まず、北山に着いたらバスのまま北山やその周りの集落を案内してもらい、北山の自然をたくさん感じる事ができました。

そのあと血圧測定の練習を少ししてから、昼ごはんをいただきました。地元でとれた作物を北山の皆さんが手作りしてくれたお弁当は非常においしかったです。次に木津志の出張診療所での健康教室に行きました。健康教室は北山診療所の三人の看護師が分担して勉強したことを、集まった集落の人々に教えているそうです。また、それに続いて大学の先生による口腔ケアの話がありました。ほんとに歯科のことは盲点でした。Q. Lと歯のことは忘れちゃいけないなとおもい、また自分の最近の歯磨きの適当さを反省しました。そのあと歯科検診もあり見学してもらいました。多くのかたが総入れ歯で驚きました。集落には歯科はないので、木津志の方にも良い機会だとおもいました。夕方にはプラネタリウムをみましたが、やはり時間があれば望遠鏡での天体観測がしたかったです。スターランド始良から帰ると、北山についての医療講演会がありました。最初の看護師さんの講演ではかつて集落の孤独死があったということから、今診療所では地域で協力して見えない患者を探す体制をとっているということがわかりました。次の保健師の講演では、北山での介護予防の取り組みについてわかりました。診療所の健康教室と同じく、医療が住民の生活に目をむけてなされていると感じました。次の地域住民のかたのお話では、診療所が住民にとってどれだけ大切かということ、住民が診療所をよく信頼しているということが伝わってきました。毛利先生の講演は、北山での人口分布からはじまり、プライマリケアについて、そして医師(学)のありかたについての講演でした。生活をみる予防医療がこれからの医療の姿勢なんだと学びました。愛情深い医師になりたいとおもいました。後援会が終わると、食事会でした。ほんとに住民の皆さんに歓迎していただいて、素晴らしい五藩でした。アユの引っかけもしたくなりました。ちゃんと焼酎が飲めたところもよかったです。

二日目は午前中にFWで地域住民のかたに北山での生活についての話をききました。かつての田舎での自給自足の生活には驚きましたし、今の若人が田舎に戻れない社会の在り方について考えさせられました。また地域の“先生”の話では、北山に越してきてどんなに良かったことかと話してくださり、優しい男にならないといけないと諭されました。私は優しい男になりたいです！これが今回のFWで北山の人々の暖かさの次に印象に残ったことかもしれません。最後はそば打ち体験をさせてもらいました。私たちは水が多かったり、少なかったりでなかなか蓄

妻をこねるのが終わらずに大変でしたが、とてもたのしかったです。

今回のFWでは北山での人々の暮らしと医療の在り方についてを、たくさん感じることができました。この企画を用意してくださった先生がたと、診療所の先生方、そして北山の地域の方々にはとても感謝しています。ぜひ北山にもう一度遊びにきたいです。最後になりますが、貴重で楽しい体験でした。



医・歯・看護学合同での実習を終えて

医学部医学科5年 中村昭彦

本実習によって得られた貴重な体験について記す。

一つ目に「地域での生活」というものを多少知ることが出来たことが挙げられる。北山の自然については、薩摩川内市の山間部を訪れたことがあり、ある程度予想は出来ていたが、実際に飲食を行うことで、北山の住民のかたが始良の市街地から離れた環境で生活しているということを実感できた。

食事は北山地区で得られる食材が中心であり、牛肉や豚肉はあまり扱わない。そもそも肉屋がなく、飼っているニワトリもしくは野生のイノシシを捕まえてみんなで食べるというお話には驚いた。

郵便局が公民館や役所の支所を兼ねており、建物の中でカボチャが売られていたことにも興味深い。

『人が集まるところに商品をおく』という意味合いもあるかもしれないが、北山地域の人の生活圏が集落中心であり、車で市街地のスーパーなどに買い出しに行くことが少ないのではないかと考えた。

自宅訪問の機会に住民のかたに伺ったところ、集落で手に入らないものはお子さんやお孫さんが定期的に来てくれるとのことだった。基本的に集落を出ない生活を送られているからこそ、「地域に飛び込んでいく」北山診療所の活動がより魅力的なものであると感じた。

忘れてはならないのが、今回の体験実習が北山診療所のスタッフ及び地域住民の皆さまの暖かい歓迎のもとで成り立っていたということである。「医療従事者は医療を与える側、住民は医療を受ける側。他に接点は無い」というドライな関係性の中では、ご家庭を訪問する実習は出来なかったと信じる。地域医療における住民の皆さまとの接し方について考えると、改めてお世話になった皆さまに感謝の意を表したい。

二つ目に、他学部の学生と地域医療について意見交換が出来たことが挙げられる。

少なくとも桜ヶ丘キャンパスにおいて、医学部と歯学部が合同で行われる授業は法医学のたった一コマに限られ、その講義においても意見交換の時間がとられることはない。今回の実習では同じ問題を共有することで大変有意義な時間を過ごせたと思う。

他学部との交流については、私自身にも反省すべき点がある。

一日目の夜にもう少し他学部の学生と話すあるいは天体観測に誘うなどしたほうが、学部間の距離が

縮められたのではないかと。食事が終わっていた・室内での飲食が禁止だったということもあり、夜はあまり学部を超えた話題は盛り上がりなかった。医学科の学生の中に、神経生理学や生化学への志望が強い人が2人いたため、生体分子の解析についての話題で一緒に盛り上がり、歯学部のかたが混ざりにくくなってしまったかもしれない。

ただ、連絡先の交換を行うことが出来たので、今回の実習の写真のやり取りをはじめ、この実習をきっかけに学部交流・情報交換を行い、次につなげることが出来れば幸いです。



北山実習

医学部医学科1年 松下裕亮

離島での医療のみでなく、僻地における医療がどのようなものであるのか低学年から実体験として知っておきたい、と考え、今回の実習に参加した。

地域の方たちへの講演会と歯科検診、患者さんの自宅訪問では、北山にすんでいる人達がどのように医療を受けていられるのかをお話しながら伺うことが出来た。そこで印象に残ったのは、北山からバスに乗ること一時間程で大きな町があり、その病院にかかることも可能である（現在でも歯科や眼科など北山診療所で診られない場合はそうしている）こと、かつて北山診療所の設備が整っていなかった頃には一日の患者さんが一人か二人で多くの患者さんは町の病院に通われていたことだ。

北山診療所の見学では、近代的な器具が導入されていることや、普通は地域の診療所では取り扱わないような薬まで備えられていることが確認できた。同じく見学させていただいた出張所に比べて新しく、設備も整っていた。

一日目の夕食会の前には、毛利先生や看護師さん達のお話を伺うことが出来た。そのお話によると、北山地区では病院にいらっしゃらない方（非社会的であったり、引きこもっている等）に対しても地域の方々と連携して診療を試みられているそうだ。独居されている方が瀕死で見つかったこともあったらしい。住民の多くが高齢者である地域では孤独死の防止にもなっているそうである。

患者さん達のお話をまとめると、地域の診療所に求める信頼できる医師は、ただ患者さんが異常を訴えた箇所だけに医療行為を行うのではなく、一回の診療で様々な診察を行い、それが終わったあとでもいろいろ話を聞く、親しみの持てる医師のようだ。このような医師がいて整った設備がなければ、近くの町の病院へと患者さんは流れてしまい、北山診療所での地域医療は成り立たなくなる。これまで山間の僻地の地域医療は小さな設備のあまり無い診療所（今回の出張所のようなイメージ）によって担われ、患者さんは緊急時以外その診療所へ通うしかないと考えていた自分にとって、この事実は意外であり、新しい発見であった。

今回の実習では、山間部の、大病院への交通の便が比較的良い僻地である北山での地域医療について学ぶことが出来た。自分の体験の中でイメージする離

島での地域医療と共通する点（求められる医師像）や異なる点（診療所と大病院の関係）があった。これからも様々な地域での実習に参加し、それぞれの場所での地域医療について学んでみたい。



北山地域医療トレーニングキャンプに参加して

歯学部5年 秋田陽子

地域医療とは? キャンプに参加する前はぼんやりとしか説明できなかった。

地域に癒着した医療。癒着とは具体的にどういうことか? 今回のキャンプで理解できたように思う。単に診療所を訪れる患者さんを待つだけでなく、住人一人一人の生活にまで気を配る。健やかで安心できる生活のお守りみたいな存在になることなのかな、と感じた。

住人の方々の信頼を得るには、病院スタッフの方々の多くのご苦労と努力があったと思う。単に、診療所を作ってさえいれば良いというものではない。毛利先生の言葉で印象深かったのは「ここで都市部と同じ医療は受けられなくても、ここにすれば都市部と同じ医療が受けられるように情報を提供できること。これが役目」というものであった。誰もが住み慣れた場所で暮らしていきたいと願うものである。物理的に不便があっても、離れられない、離れたくない理由がある。地域医療の役割の一つは、住民がその土地に住んでいることによる不利益を生じさせないことであると感じた。

このキャンプで一番衝撃を受けたことは、住民の方々の生活が私たちのものとは大きく違っていたことである。距離的にはバスで1時間程度の差でしかないのにである。ある種のカルチャーショックであった。「限界集落」という言葉は読み聞きして理解していたつもりであったが、実際にその中に入ってみると色々と考えさせられるものがあった。高齢化率が65%を超えており、その中の数十パーセントが独居であるという。孤独死も報告されている。若い動労力がなければ、いずれ居住地として立ち行かなくなる可能性がある。我々はこの現実を、こういう集落があるのか、という感想だけでやり過ごしてはいけないと思う。県や国はこういう部分には大きく介入すべきであると考えた。

街灯も娯楽施設も殆ど無い。物も少ない。だからこそ人と人の繋がりが生命線のようなものだった。誰かが言っていたが、集落の誰もが顔見知りで大きな家族のような関係が成り立っていた。集落に人が留まったり、再び帰ってこようという気にさせる所以はこの辺りにあるのかもしれない。

緑や星がもの凄くきれいだった。野菜や木の実、お魚、お米が美味しかった。遊び半分で参加した我々を快くもてなしてくださった北山の方々の温かさが嬉しかった。久々に感じた種類の感動があった。医療の知識だけでなく、人と接する上で大事なことを多く学ぶことができた2日間であった。今後の自分の生き方に生かしていきたい。



北山トレーニング感想

歯学部5年 阿部繁和

最初に行くことは考えてなかった。友達に誘われてちょっと面白そうだなと思って気軽な気持ちで参加した。着いてみたら市内からわずか一時間の距離でこんなに自然にあふれているところがあるとは知らなかった。段々畑があり、山々に囲まれ、地域の人たちの話によると猿が農作物を荒らしにくることがある。何とのどかなとこなんだと思った。着いてからはまず診療所の人たちとあいさつを交わし、診療所の見学、そして、バイタルサインの測定の実習。最初とまどったが、やっていくうちに慣れてきて、OSCEの課題にもあるということを知り、俄然やる気がでた。なんか得した気分だった。その後は昼食。地元の食材を使ったルシーな弁当。ゴーヤの漬物は生そのままという感じでなかなか新鮮な体験だった。その後はまたバスに乗り、近くの公民館に行き、地域の人たちと交流会。ほとんどお年寄りだったが、みんな元気でよく日焼けしていた。看護師さんや先生の話と一緒に聞き、近くのおばあちゃんといろいろ話しをした。先生が日ごろの口腔ケアの仕方を説明し、みなさんの口の中を軽く診察することになった。付き添いで見させてもらったが、患者の接し方など勉強になることが多かった。その後は帰ってきて夕食。ごちそうだった。

地元の人が近くの川で天然の鮎をとってきて、それを熱した石の上で豪快に丸焼き。初めて食べたかもしれないし、大きいものは串刺しにして丸ごと塩焼きで食べた。小さいものはすり潰して味噌、砂糖、地元でとれたネギやナスとまぶして食べたのだが、とても美味しく山の恵みという感じがした。また、栗ご飯のおにぎりやぶどう、地元のお母さんたちが丹精込めて作ってくれたいろいろなおかずはほんとに御馳走で久しぶりにおいしいご飯を食べた気がした。その夜はもう早めに就寝した。宿泊したところは以前小学校だったところだが、夜はなかなか雰囲気があって、トイレに行くのも少し勇気がいるくらいだった。

次の日は、地域の人たちが飯ごうで炊いたご飯と、地元の食材が入ったみそ汁をいただいた。そして、グループに分かれ、地域に住んでいるお年寄りの人の自宅に訪問した。最初に訪問したところは奥さんを亡くされ一人で生活されているおじいさんで、農業を営んでいた。親切に私たちを迎え入れてくれ、奥さんを介護した時の話は今の生活などいろいろと話してくれた。山間にあるとても景色のよいところで最後にスイカと一緒に食べた。

二件目は商店をやっている夫婦を訪問した。とても詣好きの旦那さんで小さい時の話から事細かに覚えていて、戦時中は満州に一人で出稼ぎに行ったことや帰ってきておじいさんの店を継いだことなど波乱万丈というかたくましく生きているなという感じがして、こっちまで元気をもらったようだった。

今回初めてこういった企画に参加したのだが、とても良い経験ができて、人々のいろいろな生活を知る

ことができ、その人たちのために将来歯科医師となる自分がどう向き合っていけるのか、考えさせられた。また、患者と医師という関係でなく、一人の人間同士向き合っていければよいなと思った、トレーニングキャンプだった。



地域医療トレーニングキャンプ2009
IN北山に参加して

歯学部5年 伊集院彩

鹿児島市から車で約一時間一北山は予想以上に近い場所にありました。大きな国道からちょっと奥に入ると、非常に山深い景色へと変わっていき、本当に美しい自然そのものが存在していて、そこだけ時間がゆったり流れているような印象を受けました。その時失礼ながら、このような山深い場所だと、きっと大変な思いをされて暮らしているのだろう・・・と想像してしまっただけですが、この二日間のために全く印象が変わることになるとは想像できない事位、最初は鹿児島市のすぐ近くにこのような場所があるのに衝撃を受けました。

最初に看護師さんに地区を案内していただきましたが、交通の便も良いとは言えない印象を受け、日々生活することが大変に思えましたし、何より医療のことが心配になりました。もし、慢性疾患を持っていたら町まで通院するのも一苦労だろうし、夜もし急に具合が悪くなったらどうしたらいいのだろうと漠然と不安になりました。診療所でどこまで対応できるのだろうか？

しかし、実際は都会と変わらない位かそれ以上の医療がここでは行われていると感じました。まず、診療所の毛利先生、看護師さんが本当に北山の為に尽力されていて、決して「待つ医療」を行っていないことに驚きました。毛利先生や看護師さん自らが患者さんのもとに出向き、ひいては民生委員さんとも協力して、見えない患者探しを行いコンタクトし、必要な情報を伝えていく一患者さんを待って診療するスタイルとは真逆で、私にはとても斬新で、逆に都会よりも隔々まで行き渡った医療に見えました。これは、交通手段の整った町では必要のないシステムなのかもしれませんが、北山だからこそ生きる、北山だからこそ必要な医療なのだと思いました。これも、従来の考え方にあぐらをかいては決して生まれてこない発想で、常に毛利先生、看護師さん方が考え、相当な努力を行ってできたものだと思えば、情熱があればできるのだなと思えば、胸が熱くなる思いでした。そして、何よりも住民の皆さんが診療所の存在、医療に満足されていて、この北山の暮らしをより一層充実したものにされているようで、この北山の医療の素晴らしさが伝わってきました。

最終日には、住民のお宅を訪問させていただきました。お話はどれも興味深く聞き逃さないものばかりで、戦後の苦しい時代、北山での厳しい生活など辛いことも本当にあったようですが、それも苦勞したとは決しておっしゃることはなく、全てを受け止めて、心穏やかに強く生きていらっしゃる姿に本当に感動し、私もこのような生き方ができたらいいのに一と思いました。

また今回の体験は、歯学部生の立場として、歯科医療が僻地医療にどのように貢献できるのか?を自問自答する時間であったとも思います。口腔ケアの重要性を伝えることはもちろん、もっと口腔に関心を持って頂くような医療を行い、QOLを向上しさらに元気な現役生活を送って頂けたらいいのかな?と思いました。この体験をもとに、歯科医療と僻地医療についてもっと考えていきたいと思っています。

今回は、北山の医療の見学のみならず、住民の方々との交流も本当に楽しく、充実した時間でした。北山の食材を使った美味しい料理でおもてなしして頂き、取れたての鮎の塩焼きの味は特に忘れられません。また、生まれて初めてのそば打ち体験も楽しく、本当のそばの味を実感させてもらいました。住民の方々に本当に親切にして頂き、心まで満たされて、本当に素晴らしい体験をさせて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回、僻地とはどのような場所なのか、僻地医療とはどのようなものなのか、を体験してもらい、僻地医療の魅力も分かったような気がします。この経験を今後の学生生活に活かしていきたいと思っています。貴重な体験を、本当にありがとうございました。



地域医療トレーニングキャンプ2009
に参加して

歯学部4年 原啓悟

歯学部での生活も早いものでもう四年目となり、私の大学生活は後半戦に突入した。まだまだ部活やバイトに明け暮れながら、勉強をするという毎日であるが、少しずつ自分の将来の歯科医師像を考え始める頃でもある。私は東京で生まれ育ったが、正直都会で歯医者やを営んでいく自信はあまりない。都会の生活がどのようなものかを知っているからだ。便利だが無機質、ヒトとヒトとの交流がないわけではないが、どこか冷たくてドライな環境という感覚は拭えない。おまけにヒトはどこか生き急いでいて、息が詰まりそうになることもたまにある。私の中では、前々から、どこか田舎で、その地域の人たちの和の中で、自分のペースで自分の力を発揮できたらいいなという思いが、少なからずあった。田舎にも都会にも、それぞれ良い面と悪い面があると思う。

どちらも極端すぎるが、とりあえず私は都会暮らしの対極である今回のキャンプに参加・体験することで少しでも経験値を増やし、将来の歯科医師像に対するビジョンがより明確になればいいなと思ひ、参加した。

参加して本当によかった。歯学部キャンパスから車で一時間足らずで行ける北山地区は、普段私が生活している環境とは異次元とっていい空間だった。見渡す限りの田園風景は想像していたものの、実際に訪れると圧倒される。こんな何もないところでもヒトは生活できるのだなと感じた。

その北山地区で、プライマリ・ケアを掲げて、そこに住む人々の健康の為に日夜働いている先生に会った。それが毛利通宏先生だ。毛利先生は二週間に一回の訪問診療をしていた。実際このような訪問診療が役立っているのか、最初は疑わしかったのだが、自

分が訪問体験をしてみて、それは確信に変わった。

それは、健康教室で先生達が推奨した、家庭に一台血圧計を備えておこうという言葉、地域の住民の方が実践していた事だ。しかもその住民の方は、毎日血圧を測定していたのだ。このことから、いかに先生方が地域の人たちとコミュニケーションを取れているか、健康の保持・増進に力を注いでいるかがこの上なく感じられた。

また、地域住民の方からの先生の信頼も厚い。地域医療施設と地域住民は、まさに密接な関係が取れている例だと感じた。

今回のキャンプを通して、地域医療の大切さを知ることができ、本当に貴重な体験ができた。今後もこのような企画に積極的に参加していきたいと思う。



地域医療トレーニングキャンプ2009
に参加して

歯学部5年 村山真

今回、地域医療トレーニングキャンプで北山に行き、現地の人や北山で医療に携わる人と接することで多くのことを学ぶことができた。

その中でも、ヒトとヒトのコミュニケーションについて改めて考えさせられた。1対1のコミュニケーションが上手く図れなくなってきたと思う。田舎育ちの私にとって、幼少のころ地域のつながり、横のつながりというもの当たり前だった。それが、小学校、中学校、高校、大学と大きくなり行動範囲が広がり、生活環境も田舎から都会に移るにつれて薄れていることに気付いた。今、隣に住んでいる人と会話をするどころか顔や名前すら分からないのが現状である。都会にすめば何不自由することなくコミュニケーションをとらなくてもやっていけることは事実である。逆に、田舎は地域でつながり助け合うことで成り立つ。

自分の生活スタイルを振り返っても仲のいい人以外は必要最小限のコミュニケーションで済ませている。ストレスの溜まる現代社会でやっていく上手いやり方なのかもしれないが、逆に、いろんな人とコミュニケーションをとることで、お互いを知り、楽しくストレスを溜めないという方法もあると思う。都会的な生活、田舎的に生活、それぞれいいところ悪いところがあるので、どちらが正しいとかはないと思う。ただ、ひとつだけ言えることは、いろんな人とコミュニケーションをとったほうが人生が楽しいということである。

歯科医になるから、コミュニケーションをとる必要はあると思う。しかし、それを抜きに、人生を楽しみたいからこれからは積極的にいろんな人と接する機会を作っていこうと思う。



地域医療トレーニングキャンプin北山を実施して



離島へき地医療人育成センター
センター長 嶽崎 俊郎

地域医療トレーニングキャンプin北山は、これまでに鹿児島大学が医学科学生に対し行ってきた離島実習の経験と鹿児島の地域性を活かした教育プログラムを、保健学科や歯学部の学生を加え、チーム医療の観点を加え行った取り組みである。今回が初めての取り組みであったが、これまでの経験と、情報収集と意見交換を行ってきた他大学の情報が活かされ、深く幅広いプログラムが実施された。実習項目は医学的実習に加え、地域を知る実習と他職種との連携実習が意識的に加えられた。地域住民との交流を通して地域を知ることが、地域医療を理解するために重要である。その中で、他職種との連携が必要で重要であることが実体験として理解できる。学生達の反応を見ても、地域との交流が実習をより印象深いものに行っていることが感じられた。また、普段はあまり交流のない他学部、学科の学生であったが、共通の体験と交流を通じて、自ら気づき、学べた点は、教育上、有意義であった。

この実習は他職種との連携がユニークな点であるので、共同で取り組む体験や学びをより増やし、他学部、学科の学生が、地域医療における連携の重要性をより深く理解できれば、より良い実習になると考えられた。

この実習は、学生はもとより受け入れ側の医療関係者や地元住民にとっても有意義な実習であり、さらに、当センターで開発した教育プログラムを改善・発展させるためにも有用な実習である。今後とも、是非、継続したいと考えているが、そのためには医療機関だけでなく、行政と地域の積極的な協力が必要である。この点も含め、今回の実習にご協力頂きました、地元医療機関、行政、住民の皆様方に深謝するとともに、今後ともご協力の程、宜しくお願い致します。

2009年夏季 第2回 地域推薦枠医学生特別離島実習を企画して



離島へき地医療人育成センター
特任教授 大脇 哲洋

桜ヶ丘キャンパスは、総合大学としての鹿児島大学の学部の中で、医療関係を集めたキャンパスです。医学科、保健学科を含む医学部、それから歯学部があり、特に歯学部は国立大学としては九州には九州大学と長崎大学と当大学の3つしかない学部です。しかしながら、この3つの学部学科の横の繋がりは薄く、特に学習の面では学生時期の交流は全くないのが現状です。学生時期の交流がないことが、医師・看護師、歯科医師になってからの人脈の薄さを招き、横断的研究が進行していないことに繋がっているような気がします。私どものセンターでは、高知大学の家庭医療道場を実際に体験・見学してきた根呂銘准教授が中心になり、この横の繋がりを築く場を地域医療に求めることにしました。高知大学では、保健学部と医学部の学生とが、高知の山間部で、地域の人と交流し、地域医療への理解と、学部同士繋がることの重要性を感じてもらおう実習を行っており、これは鹿児島でも実施すべきとの結論に至ったのです。

医学科長、保健学科長、歯学科長の協力の快諾はいただきましたが、実際に応募をかけ、学生が興味をもってくれるか、また歯学部の教員の協力が得られるか、見切り発車で準備開始となりました。今回学習の場を与えてくれた始良町の北山地区は、非常に自治会活動が盛んなところであり、北山診療所の毛利先生の音頭のもと、強力な支援態勢を敷いていただきました。学生もそば打ち体験などの山間地域の特色を生かした企画に興味を示し、予定の人数を確保できました。彼らは私どもの心配をよそに、地域医療には非常に興味を持っており、実習では積極的な姿勢を見せてくれました。

地域の方々は、いろいろなもてなしを考案してくださり、費用も、労力も大変だったことと思います。企画者としては盛り上がったことに感謝し、安堵するとともに、地域医療が求められていることを今更ながらに実感した機会となりました。

平成16年度の新研修医制度から始まった地方大学入局者の減少は、3-4年経って実際の地域医療への影響が出てきています。最初に影響が現われたのは、出張先としての地域の中核病院で、現にいくつかの病院ではその存続が危ぶまれるほどになっています。もう少しすれば、地域の末端の診療所に及んでくるでしょう。こうした懸念の中で、医師が地域住民の医療・保健・福祉の面から、総合的に健康管理を行っているのが、地域医療、特に離島へき地での医療の特徴です。これには多くの医療関係者の協力が必要ですし、そこに歯科医師を含めた健康管理は、まだまだ広く行われているわけではありません。今回の北山という素晴らしいフィールドでの学生同士の交流を通して、こうした分野の推進もできるとすれば、更にこの実習は意義深いものになるでしょう。これからの彼らの働きに期待すると共に、更なる医学教育の在り方・やり方への模索もしていきたいと考えています。

「地域医療トレーニングキャンプ in 北山」を計画実施して



離島へき地医療人育成センター
根路銘 安仁

実際の医療現場は、多職種により構成されるチーム医療を行うことが重要です。しかし、医学生、看護学生、歯学生は個別に教育されており、学生時代にチーム医療を考える機会は少ないです。そのため、多職種の学生を同時に実習する機会を設けて、学生時代に考えるきっかけにしたいと考えていましたが、いろいろな条件で候補地を決めかねていました。そんな本年春、初めて北山診療所を訪問させてもらった際に、ぜひ学生実習をここでしたいと思いました。その理由は多くありますが、毛利通宏先生をはじめ北山診療所スタッフが魅力的だったのが一番の理由です。また、地域医療を学ぶ上で地域の生活を知ることが、非常に大事なことです。毛利先生にご紹介いただいた北山校区地域コミュニティ協議会長の肥後利治様を窓口にして北山地区の方々に協力していただきました。

一方、榮鶴義人医学部長、吉田愛知保健学科長、歯学部教授会の許可をいただいて参加者を公募しました。公募開始が夏期休暇の直前だったこと、これまでに実績がなかったことから直前の申し込みで、当初の募集人員近くまで達しました。最終的には1名が残念ながら病欠となりましたが、医学科は1年生から4年生まで6名、保健学科からは2年生2名、歯学部からは4、5年生5名、全員で13名の参加となりました。

実習日は天候も良く過ごしやすい気候でした。実習は北山地区の方々の歓迎を受けて申し訳ないぐらいで、大変ありがたく感じました。実習内容は、北山診療所の地域内の医療者のみだけではなく幅広い職種・人々の連携、毛利通宏先生の姿勢、看護師の役割、地域医療における口腔ケアの重要性を学べるように企画しました。学生のレポートをみるとこの実習の企画意図は十分に達成できたのではないかと思います。私達が意図した以外のことも学んでいた様でした。今回の企画で歯学部予防歯科の於保孝彦教授には、企画を教授会に諮ってもらい、西山毅先生、中村康典先生に口腔ケアの指導をしてもらうように調整していただくなど大変お世話になりました。

今回の実習は、多くの人々のお陰で初回として大変成功に終わったと思います。ご協力いただいた方々にこの場を借りて感謝申し上げます。今後も北山地区で年に1回程度、地域医療トレーニングキャンプを開催していきたいと考えています。今回の成功で、次回以降は口コミで参加者が増えて、よりよい実習に育っていくことを願っています。実習を受け入れてくださる北山地区の方々のために、何か役立つこともできていければと思います。また、今回は初回で我々教官のみで実習内容を決めましたが、次回からは今回参加してもらった学生さんを中心に企画の段階から参加してもらおうと考えています。毛利通宏先生が学生時代にフィラリア研究のフィールドワークに参加したことが、現在の北山診療所での地域医療につながっているように、この地域医療トレーニングキャンプが参加者の将来の地域医療へのきっかけになれば幸いに思います。皆様、ありがとうございました。

地域医療トレーニングキャンプ in 北山



国際島嶼医療学センター
講師 新村 英士

今回、初めて始良町の北山地区で鹿児島大学の医学部・歯学部学生に対する「地域医療トレーニングキャンプ」が行われました。今回の企画に関しては北山地区の皆様の多大なる御協力があり非常にスムーズに実習を行えたことに改めて感謝いたします。

3年前より鹿児島大学医学部医学科の6年生に対して始まった離島・地域医療実習において昨年度より始良町北山診療所に実習の受け入れを御協力いただきました。この実習では将来自分が医師になるという視点から北山地区での地域医療を学ぶことが主眼となっていますが、今回のトレーニングキャンプは医学科の学生だけでなく、保健学科や歯学部の学生達とともに医療に関してだけでなく地域の特徴や地域での生活そのものについて学ぶことを目的として企画されました。

初日はバスで地域を巡り、地元の方から地域の地理的状況、生活環境、道路事情、産業、医療資源など様々なことを講義して頂きました。夜には地元の方々との交流会が開かれ、地域の特産品や珍しい料理などをご馳走になりながら様々なことを話し合い、地域に対する理解を深めました。二日目は少人数のグループに分かれそれぞれ家庭を訪問してお話を聞かせて頂きましたが、その際それぞれバックグラウンドが異なる学生がグループになるようにグループ分けがされました。一口に医療従事者と言ってもそれぞれ専門分野が違えば物事の捉え方が異なり、場合によっては180度反対の意見が出ることもさえます。私自身は医師になってからそのことに気付かされましたが、今回キャンプに参加した学生達は早い時期から身をもって体験できたことと思います。家庭訪問の結果についてはみんなで集まっての報告会が行われ、それぞれが体験したことの共有が図られました。まだ専門知識が不十分な分だけ逆にそれぞれの職業による先入観などが少なく、思考が柔軟性に富んでおり、立場の異なる様々な人の意見を色々と聞きながらこれから自分たちがどの様な医療人になるべきかについて考えることが出来たようでした。

これからそれぞれの専門知識を学びながら医師、歯科医師、看護師、保健師、理学療法士、作業療法士など異なる医療人になっていくことと思いますが、今回の貴重な体験を忘れずに自分の専門分野だけにとらわれない、幅広い視点を持った医療人になってもらいたいと思います。

「地域医療トレーニングキャンプ in 北山」を計画実施して



国際島嶼医療学講座
平佐田 和代

北山での実習は、私にとって貴重な体験となった。改めて1泊2日の体験を振り返り今もなおそう感じている。

私の北山実習参加の目的は、2つあった。一つは、北山診療所の看護師の活動を学びその魅力を体験する。もう一つは、大学スタッフとして3学科の学生実習のサポートと、彼らの反応をみたいということであった。

まず、一つ目の目的であるが、私自身の看護の経験は大学病院におけるもので、日々業務に追われていたという記憶がある。患者を生活者としてとらえた看護をするということの大切さを感じながらも、実施できたかという自信はない。「北山の看護師さんは魅力的だよ」との噂に、大切にしたい看護がそこにはあるような漠然とした期待と、興味をもって実習に参加した。実際に、訪問の同行や交流会の中で、看護師の方々が看護師以前に人として住民の方々への想いを沢山もちながら対象者と向き合っているということを感じた。そこで、目を合わせ時を共にし、感じ考えるそして身体だけではなく心も癒す看護を体験できた。活動の発表ではこれまでの診療所の活動経緯と、事例を通して具体的な他職種と連携した活動についてその細やかな配慮とそれぞれの想いについて学ぶことができた。さらに、住民からのコメントや家庭訪問で聞いた話で、保健医療関係者だけではなく、地域住民の自分たちも他住民のサポートに協力したいと話されており、これまでの診療所スタッフの方々の活動に信頼をもっていることを強く感じた。一方的な医療の提供ではなく、毛利先生をはじめとする北山診療所のスタッフが地域を育て、地域が診療所を育てるという相互作用により北山独自のスタイルが時間をかけてできたのだと理解した。

次に、二つ目の目的であるが、もちろんセンターの先生方の細やかな準備もあるが、なにより北山の方々のご協力と配慮のおかげさまですべてがスムーズに進んだと感じ、私自身は自分が学ぶ・楽しむことばかりであった。3学科合同の初めての实習では、それぞれの専門を学んでいる立場ならではの視点を垣間見たり、意見を聞くことができた。私にとっても初めての経験であり、それらの反応は「おもしろい」この一言に尽きた。実習での体験に加え他学科の学生との交流は、これから各専門分野を学ぶ中で新しい視点を彼らの中に取り込んだと考える。学生時代から他職種との関わりを持つ経験が、自分の職種の強みを知る事に加え、他職種へ目を向けることにつながり、結果的に対象者への関わりにおいて他職種連携が意識されるようになると思う。以上より2つめも目的達成としたい。

最後に、学生が実り多い体験学習が出来たこと、私自身も目的達成出来たのは、毛利先生をはじめスタッフの方々、自治会の方々、訪問を引き受けてくださった皆様のおかげさまで。北山の土地と人に癒され、何より、あたたかい気持ちにさせて頂きましたことに心からお礼申し上げます。そして、「私はなぜ医療者を志したのか」課題を胸に、再会を楽しみにしております。

【編集・発行】 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 離島へき地医療人育成センター

【住所】 〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8丁目35-1

【TEL/FAX】 TEL(099)-275-6898 FAX(099)-275-6899

【URL】<http://www.kufm.kag.shima-u.ac.jp/~ecdr/>

【MAIL】rural@m2.kufm.kag.shima-u.ac.jp

